

## はなしばい（百合）『ソワレの亡霊』

### 【登場人物】

劇作家……劇作家であり演出家。三ヶ月前、自身が脚色した新しい『かもめ』の舞台が流行病で中止になった。劇作家も女優もどちらも同じ役者が演じる。

女優……舞台女優。三ヶ月前、劇作家が作った舞台『かもめ』のニーナ役を降板した。降板以後、劇作家とは会っていない。女優も劇作家もどちらも同じ役者が演じる。

百合の花が大きく映る

明転

喫茶店

向かい合って座る作家と女優。どちらも同じ役者が演じる

女優は百合の花束を抱えている

作家（ナレ） 「（原稿に向かう）はじめに。これは劇作家である私の貧しい想像力が生み出した、夢や幻や三文芝居の類だ。二人の会話劇に見せかけた孤独な自問自答……つまりは創作過程の一環。」

女優 「次の作品のテーマは？」

1

作家 「君は変わらないね。いや、でも少し痩せたかな。目が大きくなったみたいだ」

女優 「太ったり、痩せたりするわけがないじゃない。これは夢、幻、影、白昼夢。行きつけの喫茶店で創作に煮詰まりながら、嘗て自分を捨てた女の……顔もろくに憶えていない舞台女優の幻影をみているにすぎないのよ。」

作家 「『捨てた』って表現は事実誤認だ」

女優 「そうね。正確には只、通り過ぎただけ。ちょうど一羽の白い鳥が、湖面から飛び立つ風にして。その昔わたしは女優で、あなたは劇作家で。わたしたちの関係は……それはそれは清らかなものだった。すんなりと伸びた芳しい白百合のように。」

作家 「（原稿に向かう）……次回作のテーマは、運命の恋。」

女優 「（ロミオとジュリエットを読みながら）『嗚呼ロミオ、名前が何だというの？ 私たちがバラと呼ぶものは、他のどんな名前でも、同じように甘く香るわ。』」

作家 「敵対する家柄同士の身分違いの恋？古くさくないかな。嫌いじゃないけど」

女優 「（嵐が丘を読みながら）『ヒースクリフは、私以上に私なの。どんなもので作られていたって、私

「たちの魂は同じよ。』」

作家 「ハハ、純愛だね。粗野だが繊細な男が、純潔な少女の亡霊を追い求める。」

女優 「運命の恋に純潔や純粹や純情はつきものなの？」

作家 「世の人々は清らかな愛だの恋だのがお好きなんだよ。君だってそうだったろ」

女優 「その純潔さが、物語の上で女性の側にばかり求められる現象は承服しかねる！」

作家 「ふ。何そのしかめつらしい口調。」

女優 「あなたの真似」

女優は鏡を見て化粧直しをする

作家 「他人は自分を映す鏡だと言うのは、使い古された言葉だけど。それなら何故」

二人の声が重なる 「人は人を求めるのか」

作家 「誰かの目に映った自分がいなければ、此処に存在することもままならない……のか？そんなわきやないよ。物語上のどんなに素晴らしい恋も、水面に映った自分自身に恋しているようなものだろう？そんな愚かなことってあるかい。」

女優、窓の外に目をやる

女優 「……街に、人通りが戻ってきたわね。皆で群れを成して。誰かが号令でも出したみたい。」

作家 「「このところテレビでもラジオでも、『人と離れろ、人と離れろ』って五月蠅いたら。ほんの少し前までは『人を求めよ、人を求めよ』って騒いでるのが常だったのに。何てこと無いか。誰も皆、『途方も無く大きな何かしらかの力』によって動かされたがってっただけなんだな。」

女優 「……あなたの元を離れたこと、後悔してる。」

作家 「ハア？何を今更。随分しおらしい幻だ……忘れもしない、三ヶ月前。この店のまさにこの席で、君は私に『かもめ』のヒロインの座を降りると言ったんだ。それどころか」

女優 「女優を辞めると、そう言ったわ。確かに。あなたの言うところの、『途方も無く大きな何かしらかの力』に屈して。」

作家 「勘違いしないでくれ。決して恨んでなんかいやしない。人生の選択に正解も不正解もないんだから。」

女優 「あの時……自分の魂の半分が死んでしまったような。そんな気がした」

作家、両手で顔を覆う

作家 「……何故、今更こんな夢を？」

女優 「顔さえろくに思い出せやしないのに。」

作家 「私は劇作家で、あなたは女優で。嘗ての私たちの関係は……運命でも、恋ですらなかった、筈。」

女優 「だけどわたしたちほんとうは……ジュリエットとロミオで。キャサリンとヒースクリフだった。」

女優、爛漫とした百合の花束を作家に手渡す

二人の声が重なる 「会いたいな、あなたに。」

女優 「懐かしいわね、この花の匂い。冷たく清らかに甘く薫る、つるりとした白い花。白い百合って不思議！お祝いの花でもあって、お別れの花でもある。」

女優、「かもめ」の本を開く

3

女優 「『何という晴れやかな、暖かい、よろこばしい、清らかな生活だったでしょう。なんという感情だったでしょう。』優しい、すっきりした花のような感情。』」

作家 「あなたと共にいた日々が、今も遠く、湖の面の輝くように眩しく見える。その過去だけが、私の救いだよ。」

女優 「わたし、今日。これから劇場に行くわ。謹慎期間明けの、ひとつめの舞台の初日よ。その前に少し、ここに寄っただけなの」

作家 「……よかった、君はまだ女優なんだな」

女優 「あなただってまだ作家よ！あなたが死んでしまっても、世界中の人が死に絶えたって、あなたの作品は、舞台の上で永遠に生き続けるわ。」

作家 「（微笑んで）初日おめでとう。」

女優 「……きつといつか。今度こそ、あなたの作品を演じさせて……外に車を待たせているから、もう行かなきゃ。」

作家 「劇場まで、一緒に行くよ」

女優 「いいわ！ひとりで行ける。ひとりで行きたいの。」

作家はピストルをこめかみにあてる

女優

「『ーつまりは一切の生き物、生きとし生けるものは、悲しい循環（めぐり）をおえて、消え失せた。……もう、何千世紀というもの、地球は一つとして生き物を乗せず、あの哀れな月だけが、むなしく灯火をともしている。今は牧場に、寝ぎめの鶴の鳴く音も絶えた。菩提樹の林に、こがね虫の音ずれもない。』」

次の瞬間、作家の姿は消える。

机の上に原稿も何も無く、女優は一人で座り、目の前の椅子に置かれた百合の花束を見つめている。

女優

「おわりに。これは二人の会話劇に見せかけた孤独な自問自答。女優の一人芝居。ほんの三ヶ月前、自ら手放してしまった運命の恋の再現。」

女優、立ち去る。

暗転

声のみ 「この世の全ての清らかな出逢いと、別れに。祝福がありますように。」